特別展〈高麗仏画〉によせて

高麗の仏画 —至元23年銘、阿弥陀如来像について—

この阿弥陀如来像は薩摩の島津家伝来で、中国・宋時代の画師張思恭筆と伝えられてきた作品です。画面には次のような金泥の銘文が書かれています。

（画面に向って右下隅）

特為国王□福寿□□
願我臨欲命終時
尽除一切諸障□
兼及己身不逢楛難
面見彼仏阿弥陀
即得往生安楽刹
奉翊大夫左常侍廉□

（画面に向って左下隅）

至元二十三年丙戌五月　日禅師
自回　筆

この銘記の大意は、最初に国王忠烈王の福寿を祈り、そして己が死に臨んだ時は現世の一切の苦難をはなれて、阿弥陀に迎えられ、すみやかに極楽往生を遂げたい、という願いをうたったものです。願主は奉翊大夫で左常侍の廉何某という人物ですが、この人物について詳しいことはわかりません。奉翊大夫とは高麗時代の官職名で、従二品の品階に位します。左常侍とは全ての政令を決定する最高機関の中書門下省に属する高級官吏のことです。更に、銘文の解釈を進めますと、この仏画は至元23年5月に禅師の自回の手によって描かれたものであることが判かります。至元23年は忠烈王12年、西暦1286年にあたりますが、この年記は現存する高麗仏画の紀年作品の中では最も古いものです。筆者の自回についても全く知るところがありませんが、彼の身分である禅師とは、国が定めた僧侶の階位です。僧侶の階級は光宗代（950～975）に、科挙制に準じて採られた僧科制によって定められました。当時仏教は教宗と禅宗の二つに大別され、各々階級を七段階に分けられ、教宗は僧統、禅宗は大禅師を最高位としました。禅師は大禅師に次ぐ禅僧の位階で、このような高位の僧が自ら筆を執ってこの巧緻な作品を仕立て上げたことに少々驚かされます。禅僧が修行や余技として描いた水墨画ならいざしらず、この作品には熟練した専門画工にして初めて用い得るような見事な画技が示されているからです。例えば、朱色の大衣は高麗仏画の特徴である金泥の宝相華の円文で飾り、緑色の裳裾には細かな雲気文をやはり金泥で全体にびっしり描いていることなどです。

阿弥陀は荷葉座の上で手に豊かな表情を見せて、あたかも往生者をやさしく迎えいれるような姿で立っています。足元の両脇に浮かぶ蓮華は往生者のために芳香を放って、一つは既に開いて座を整え、今一つはまさに開こうとしているかのように思われます。画面には赤・黄・緑の原色を用いて、高麗仏画に特有の華麗な装飾性を引立たせていますが、そこには礼拝画としての荘厳さと共に、一種の大らかさが感じられます。（吉田宏志）

季刊 美のたより No.44
昭和53年 10月15日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.